

パネルディスカッション講演録 「山梨の魅力と可能性を活かす ためのキーワードは？」

パネラー

やまなし暮らし支援センター移住相談員

倉田 貴根 氏

山梨県立大学 地域戦略総合センター 特任教授

澤 伸恭 氏

東京からの移住者(鳴沢村在住)

土屋 文明 氏

山梨県立大学 よつびし総研

大沢 華 氏

コーディネーター

山梨中銀経営コンサルティング株式会社

岡本 新一

日 時 : 平成28年7月25日(月)

15:00 ~ 16:30

会 場 : 山梨県立図書館2階 多目的ホール

主 催 : 山梨中銀経営コンサルティング(株)

司会

山梨県を移住地として選んだ理由および山梨の魅力は。

土屋さん

山梨県鳴沢村に決めたきっかけは富士山の美しさであった。山梨は自然の豊かさと東京からの近さが魅力。東京から近いので従来の友人関係を維持できる。また、東京の友人にも気軽に来てもらえる。スポーツが好きだが、ゴルフは東京と比べて、価格が半値、ゴルフ場へのアクセス時間は3分の1。テニスもやっているが、テニスコートがいたるところにあり、使用料は東京の10分の1である。

司会

土屋さんが語った山梨の魅力は地域資源という言い方もできる。澤先生は地域資源にお詳しいと聞いているが、教えて欲しい。

澤先生

地域資源とはそれぞれの地域が持つ固有の資源である。国は平成19年に地域活性化を目的に地域資源活用促進法を制定した。地域資源を活用することで地域活性化を図るなど一定の要件を満たした中小企業の事業計画を国が認定し、支援する制度である。山梨県には、富士山をはじめ、ぶどう、もも、ワインなど、全国的にも有数の地域資源が数多くある。私は地域資源活用促進法に関する中小企業支援の山梨県担当をしているが、他県の担当者から、山梨県は他県と比べて非常に地域資源に恵まれており、うらやましがられることがある。大切なことは、私たちが山梨県の恵まれた地域資源に気づいて、それを活用することである。

司会

現在は、地域資源に気づくとともに、それ

を積極的に活用していく時代と言える。土屋さんと澤先生にお話を聞いたが、やはり山梨県は様々な魅力にあふれていることが分かった。ところで、倉田さんは講演会の最後の部分で、教育の重要性について触れられた。その点について、もう少し深掘りしていきたい。ここから、「教育」、「若者」というテーマで話を進めていきたい。

倉田さん

私自身は山梨について深く知ることなく、また、山梨に関する教育を受けることなく大人になったという印象がある。しかし、子ども時代の山梨での体験、その良さは体感として覚えている。その山梨の良さを小学校、中学校のときにもっと体系的に教えるべきである。また、高校生になったら山梨県内の企業について、もっと知らせるべきである。大人たちが子どもたちに、山梨の良さをしっかりと伝えていく仕組みが必要である。

司会

子どもたちに、山梨の良さを伝えていくことの大切さをお聞きした。ここで、若者であり、かつ、よつびし総研で地元の魅力を発掘している大沢さんに、よつびし総研の活動内容や、地元を知ることについてお聞きしたい。

大沢さん

よつびし総研の主な活動は、「ビシランガイド」によるお店の紹介のほか、甲州夢小路のアドバイザー、甲州印伝様とコラボレーションによる商品企画等の活動をしている。今、嬉しく思っていることは、よつびし総研の活動を通じて、私自身が甲府の魅力を発掘していることである。高校生のときはよく昭和町のイオンモールに行っていた。

しかし、大学生になりよつびし総研の活動を通じて、甲府の中心街にも、お洒落なカフェや魅力的なお店がたくさんあることを発見している。

司会

若者が地元の魅力を知ることが大切だと思うが、澤先生は山梨県立大学の学生を通じて甲州市の魅力を発掘する活動をしていると聞いているが。

澤先生

皆さんのお手元の封筒に「甲州らいふ」という冊子が入っている。これは山梨県立大学と甲州市が協働で制作しているフリーペーパーである。県立大学の学生が甲州市の魅力を自ら発掘して、それを記事にまとめたものである。甲州市の魅力を発信し、観光客の増加を促し、最終的には移住・定住につなげたいとの目的がある。このフリーペーパーは、甲州市の魅力的な「人」に焦点を当てている。魅力的な人を取材することにより、学生がその人の生き方、考え方に共感し、記事として伝える。その記事に共感した人が、甲州市の魅力を感じるということを狙っている。実際に学生の取材に同行すると、取材対象の方々が甲州市の魅力を熱心に語ってくれる。すると、学生はその人に魅せられ、共感し、結果的に甲州市をどんどん好きになっていく。活動に携わった学生はみな甲州市が好きになるように感じている。今日、この会場に昨年まで山梨県立大学で共に「甲州らいふ」制作に携わり、今年から甲州市役所の職員になった鶴田さんも来ている。ひと言コメントをいただきたい。

鶴田さん

一般的に行政が作る資料は市の施設や市独

自の取り組みなどを紹介するものが多い。しかし「甲州らいふ」は甲州市に住んでいる「人」に焦点を当てている点が興味深かった。「甲州らいふ」の制作を通じて、多くの人と出会うことができ、その点が自分にとって財産となった。4月から甲州市役所に勤務しているが、今後は職員として「甲州らいふ」の制作に携わっていきたい。

司会

素晴らしい取り組みだと思う。大沢さんにお聞きしたい。若者が地元の魅力を知ることにより、卒業後に山梨に残る、あるいは一度は県外に出ても将来的に山梨に戻ってくる可能性は高まると思うか。

大沢さん

若者が地元を知ることが重要だと思う。学生は週末にアルバイトをすることが多い。その際、大手チェーン店で働くのと、山梨のことを考えている店長がいる地元の店で働くのでは、得るものが違う。学生時代に若者が山梨県で幸せに働き、そこで経験値を積む。そのことが将来に大きくつながってくると考えている。私は富士川町の飲食店でアルバイトをしているが、お金以上に学ぶことがたくさんある。アルバイトを通じて地域の課題や問題点を自分で主体的に感じることができる。そして、若者としての意見を社長に伝えることにより、会社も営業戦略に活かすことができる。そのような幸いな経験を通じて、若者が将来的に山梨に就職する、あるいはいつの日か山梨に戻り、自分が学んできたことを山梨でのビジネスに活かし、活躍することはあると思う。

司会

若者が地元を知ることの重要性を改めて教

えられる。倉田さんに「教育」、「若者」という話題に対する総括をお願いしたい。

倉田さん

大学生は金の卵だと思っている。県内に大学がいくつかあるが、大学時代を山梨で過ごした経験が忘れられず、やまなし暮らし支援センターを訪れる人もいる。大学4年間にどのような経験をするかはとても大切。先ほどは、小・中・高校生に対する教育の重要性をお話したが、大学時代に山梨を知ることも重要なポイントである。

司会

先ほど、澤先生の「甲州らいふ」制作のお話の中で、甲州市の「人」に焦点を当てている点が印象的であった。一般的に、魅力というと施設や名所など「ハード」を考えるが、地域の「人」に魅力があり、「人」も重要な地域資源であると教えられた。ここから、山梨の「人」あるいは「山梨県人の気質」、「県民性」というテーマで話を進めたい。県外から来られた土屋さんにお聞きしたい。山梨県人の気質や県民性についてどのように感じているか。

土屋さん

サラリーマン時代に山梨県に1年ほど単身で来ていたことがある。そのときは山梨県の方と一緒にビジネスをさせていただき、商売のやり方という点でいろいろと参考になった。県民性に関する印象は「最初はなかなか溶け込めない、本音を話さない。しかし、打ち解けてくると非常に正直で、親密に付き合ってくれる。だから末永いお付き合いができる」というもの。当時の甲府のお客さんとは40年来の付き合いをしている。今振り返ると、そのような山梨県の方の気質も移住先を山梨に決めるときに影

響を与えたかも知れない。それから、人と人との付き合い方も印象的である。引っ越して来るとき、鳴沢村役場の方とお話ししたが、非常に親切であった。例えば「テニスをやるなら〇〇さんのところに行けばサークルに入れる」、「家を建てる時、ガレージの柱は4本にした方がいい」などのアドバイスをしてくれた。その後も、役場の職員からメールをいただいたりした。東京で市の職員の方とこんなに親しく話をすることはなかったので、役場の方からこれほど親切なアドバイスをいただくとは夢にも思っていなかった。山梨県人の人柄の良さを感じた。その後、郵便局で手続きをしていたとき、警察官の方が近寄ってきて「どこに引っ越されてきたのですか。安心して生活できるように、私が責任を持って警備します」と言ってくれた。隣でその会話を聞いていた人が「私の家から近いですね」と話しかけてきて、様々な地域の情報を教えてくれた。このようにとても親しく話しかけてくれる人々の温かさを感じた。

司会

東京と比べて、人との付き合い方がだいぶ違うと感じるか。

土屋さん

東京では、知らない人から話しかけられることはまずない。また、人とぶつかっても知らんぷりということが多い。鳴沢村では多くの人が互いに知っているので、知らんぷりなどということはありません。街であっても、お互いに顔が分かるので、自然とあいさつを交わす。

司会

「人」というテーマで大沢さんに聞きたい。よつびし総研の活動をする中で、多くの人

から助けられ、応援されていると思うが、その点について感じていることはあるか。

大沢さん

私たちの活動は、甲府という街があり、そこに人がいないとできない。活動するうえで人と人とのつながりは非常に大切。先日実施した浴衣祭りで、何か景品を出して欲しいと早川ベーカーさんをお願いに行ったところ、喜んで商品を提供してくれた。そのとき「学生の皆さんには本当に感謝している」、「甲府に多くの人を呼び込んで欲しい」と言われた。そのような経験を通じて人と人とのつながりの大切さを教えられている。本日も会場に来られているが、オリゾンチスというお店の福島さんをはじめ、よつびし総研の働きは本当に多くの人に支えられている。

司会

本日、会場にお越しいただいている福島さんからコメントをいただきたい。

福島さん

よつびし総研の皆さんには、街の賑わいのために活動していただき、感謝している。先日も1年生が中心となり企画した浴衣祭りを開催してもらった。その他、よつびし総研の皆さんには、様々な面で助けてもらっている。私自身も4年前に県外から移住してきた。先ほど倉田さんが講演で言われていたが、あいさつはいいものである。あいさつを交わす中で、だんだん人と人がこやかになり、つながりが深められていく。よそ者の私であっても、街の人々とあいさつをしながら、交流を深めていくことができた。また、先ほど大沢さんからイオンモールの話があったが、かつてオリオンイーストにはパセオがあり若者も多く来て

いた。最近、オリオンイーストに若者が帰ってきて店を開くケースが増えている。彼らは、学生時代にこの場所で経験したことが忘れられず、帰ってきて店を開くと言う。商店街として、そのような若者を応援したいと思っている。そのように、若者たちが魅力を感じて、オリオンイーストで頑張ろうという機運が出てきている。

福島さん（奥さま）

現在、オリオンイーストでオリゾンチスという雑貨店を営んでいる。よつびし総研の皆さんには大変お世話になっている。彼らは「甲府おもてなしBOOK」という冊子を作っている。彼らは実際に様々な店に取材に行き、買い物をしたり、食事をしたり、お茶を飲んだりしている。そのように自ら足を運び、体験したうえで、店の良さを紹介してくれている。

司会

福島さんのお話を聞くと、学生と商店街がWin-Winの関係を築いている。そして、人と人がつながることの大切さを教えられる。ところで、澤先生も県外から移住して来られたと聞いているが、先生が山梨県人、あるいは気質という点で感じていることを教えて欲しい。

澤先生

私は12年前に東京から北杜市の小淵沢に移住した。山梨県人はよく「閉鎖的」と言われる。私自身は「閉鎖的」とは思わなかったが、最初の頃は、山梨の人は「シャイ」、「人見知り」と感じた。しかし、しばらく山梨で暮らしてみても感じることは、とても親切で人柄が良く、面倒見が良いということである。地元の人ともよく飲みに行ったりするが、しばらく参加できない期間が続

くと「大丈夫か」と気遣ってくれる。これは良い点の話であるが、もう一つ別の観点から言わせてもらおうと、山梨県の方は東京に敬意を払い過ぎているのではないかと感じる。東京のことを良く思い過ぎなのでは、と思うことがある。もっと、自信を持って良いのではないか。なぜか、東京を意識しすぎている印象がある。例えば長野県の方は、山梨県の人とは対照的に、初対面の人に対してもどんどん話しかけてくる印象がある。また彼らは、山梨県の方が東京に敬意を払い過ぎているのとは対照的に、自分の街や地場産品にとっても自信を持っているようだ。例えば山梨県の酒屋の多くでは、地場産品よりはナショナルブランドの商品が多いように思う一方、長野県に行くと、日本酒もワインも長野県産の商品しか置かないというくらいの印象を受ける。長野と比べても、山梨の方は東京に敬意を払い過ぎているという印象がある。

司会

倉田さんは山梨県人の気質についてどのように感じているか。

倉田さん

相談員の仕事をしていると、県外の方から「ネットで検索すると、山梨県の方は外から来た人を受け入れないとあるが、それは本当か」と聞かれる。外から来た人を警戒することは山梨に限らず、多かれ少なかれ、地方に行けばどこにでもある。山梨だけがそのような傾向が強いとは思わない。もっとも、先ほど澤先生からお話があったように、最初はシャイであるということはあるかも知れない。しかし、一旦親しくなると非常に面倒見が良い。ある移住希望者から聞いた話だが、山梨では、大きなスーツケー

スを持って駅の階段を登っていると、必ず誰かが手を差し伸べてくれる、必ず誰か知らない人が声を掛けてくれるという。子育て世代の母親からは母親同士のつながりがすぐにできると聞く。また、山梨に来てから子どもたちの顔つきが明るくなったとの話も聞く。東京では、子どもが騒がないように非常に気を遣わなければならない。そのような環境で子育てをしていた母親が、山梨県に移住した後、子どもが非常に伸びやかに育っているという。それは、周囲の人々の影響も大きいと思う。よく「山梨の人は閉鎖的である」と簡単に言ってしまうが、少し考え方を変えたほうが良いのではないか。

司会

ここまでの話をまとめてみたい。3点ほど話が出たと思う。一つは、山梨県には私たちがまだ気づいていない魅力がたくさんありそう、そのような魅力、地域資源は積極的に活用すべきであるということ。二つ目は、一般的に魅力というと、美しい景観などハード面をイメージするが、実は山梨にいる「人」にも大きな魅力があるということ。三つ目は、「教育」、「若者」という観点から考えると、子どもたちが小さなときから山梨の魅力を知ることを通じて、将来的に若者が山梨に残る、一度は県外に出ても山梨に戻ってくるということにつながる可能性がありそうということであった。ここから、さらに議論を深掘りし、「人口減少問題」、「若者の流出」、「働く場」という観点から話を進めたい。大沢さんにお聞きしたい。若者が就職のタイミングで県外に流出している事実があり、学生からは「山梨には働く場所がない」との声が聞かれる。実

際のところ、学生はどのように感じているのか。

大沢さん

甲府商業高校では進学と就職が半々である。そのとき、就職する人からは「山梨は働く場所がない」との声をよく聞いた。しかし、高卒で働く場合、親も県外に出したくないとの思いがあり、県内に就職する人が多かった。その場合でも、職種による制限があると感じている人が多かった。また、「山の向こうの東京には面白そうな何かがある」と感じている学生は多いと思う。しかし、その一方で、私たち学生の側も山梨の企業を知らないし、知ろうともしない、あるいは知る機会もない、これもまた事実だと思う。

司会

「働く場」、「職」ということを考えるとき、若者の就職もさることながら、県外から移住してくる人にとっても、この点は重要なポイントと思うが、倉田さんはどう考えるか。

倉田さん

あるとき、山梨県出身で東京に暮らしている30代後半のシステムエンジニアが山梨への移住相談に来た。彼は、東京のハローワークに行ったが「システムエンジニアで、30代だと転職は無理」と言われてしまった。しかし、彼はどうしても山梨に帰り、システムエンジニアの仕事を続けたかった。そこで、彼に山梨で開催される就職相談会を案内したところ、彼は新卒採用のブースに行き自分を売り込んだ。結果的に彼はその会社に採用された。最近、彼が就職した会社の方がやまなし暮らし支援センターに来て、こう言われた。「彼は新卒者ではなかつ

たが、素晴らしい人材だ。他にも彼のような人材がいたら紹介して欲しい」。ちょうどそのとき、偶然窓口を訪れていた移住希望者の職業を聞いたら、なんとシステムエンジニアであり、互いに話をしてもらった。有楽町の窓口ではそのようなことはよくある。この例をみると、キーワードは「マッチング」ではないか。先ほど、大沢さんから学生が企業を知らない場合も多いというお話があったが、上手にマッチングしていくことが重要と考える。

司会

移住者が山梨で職を探すことは決して簡単ではない。しかし、効果的にマッチングを行えば、道が開かれるケースもあると思われる。ところで、マッチングと言えば、澤先生はCOC+の取り組みに関与されているが、その話をお聞きしたい。

澤先生

COC+とは、「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」のことである。これは若者の地元定着と雇用創出を図るために、大学が地元の自治体や企業と協働して推進していくものである。先ほど「マッチング」というキーワードが出たが、学生や学生の親が県内企業を知らない就職にはつながらず「とりあえず東京の名のある企業への就職を考えよう」となる。しかし、東京の大企業でも将来どのようになるのか分からない時代である。一方、山梨にも素晴らしい企業がたくさんある。しかし、学生は山梨の企業を知らず、企業も学生のことを知らない。そこで、今年からCOC+の取り組みの一つとして、学生が企業などと実践的な活動を行う「フューチャーサーチ」をスタートした。具体的には学生が企業のプロ

プロジェクトに深く参画して、企業と共に考え、活動することにより、学生は企業を深く知り、企業も学生を良く知ることができる。学生と企業がお互いに深く知り合う中で、就職につなげていこうという仕組みである。まさに、マッチングと言える。新卒だけでなく、一度県外での就職を経験した人でも、このフューチャーサーチの対象にしていくことを考えている。

司会

大沢さんはCOC+について、聞いたことがあるか。

大沢さん

よつびし総研も山梨県立大学としてCOC+に関わっている。私は個人的に「山梨学」を授業で取っている。「山梨学」とは山梨県を福祉、観光、歴史など様々な視点から学ぶことができる授業である。そこでは、例えば県内の福祉の現場で活躍している人の話を直接聞くことができる。私は高校生のときに山梨県立大学には「山梨学」があると聞いた。それは、進路を決める際の重要なポイントとなった。山梨に生まれ、山梨に育ちながら、山梨のことを知らないなんてあり得ないという思いがあった。だから、ぜひ「山梨学」を学びたいと思っていた。現在、山梨を学び、山梨を発信したいとの思いを抱きながら「山梨学」を受講している。

司会

若者が山梨を知り企業を知ることの大切さ、企業の側も若者を知ることの重要性、さらには、若者あるいは移住希望者と県内企業をマッチングさせていくことの必要性を議論した。このような議論をしていると、「若者の流出」や「働く場がない」という問題

に対して、打つ手はいろいろありそうな気がしてくる。もう少し「働く場」、「職」という視点から考えたい。澤先生は「クラウドファンディング」を通じて「働く場」、「チャレンジする場」の提供に関与されているが、その点について教えてほしい。

澤先生

クラウドファンディングとは、インターネットを通じて少額のお金を多くの方から広く集めるものである。山梨という地域に特化して、クラウドファンディングを使って、チャレンジの場を提供する仕組み、それが「FAAVO やまなし」である。先ほどお話したCOC+の立ち上げと同時に、この「FAAVO やまなし」がスタートした。この仕組みを使うことにより、山梨に関係する事業を生み出したい、地域の課題を解決したい、あるいは新しいイベントを実施したいという人がいた場合、資金面でのリスクを抑えながらチャレンジできる。例えば、ある事業をやりたい人がいて、100万円の資金が必要な場合、「FAAVO やまなし」のサイト上で資金を募る。その事業に共感する人が資金を出資し、100万円集まったところで事業をやりたい人に、そのお金が渡される。山梨にいる頑張りたい、チャレンジしたいという人を、このような仕組みを使って応援したい。山梨を「チャレンジしたい人がチャレンジできる場」にしたい。また「FAAVO やまなし」の特徴は、東京に出て行った人も、インターネットを通じて山梨を支援できる点にある。

司会

東京に出て行った人も山梨を応援できる、あるいは山梨とつながっていただけるというのは非常に興味深い。澤先生のお話で、

「チャレンジ」というキーワードが出た。土屋さん、山梨で「チャレンジの場」を提供した場合、東京にはチャレンジャーがたくさんいると思うか。

土屋さん

例えば、農業を考えたとき、北杜市は日照時間が日本一である。同市では耕作放棄地をまとめて、農業生産法人に農地を提供している。そこでは、非常に多くの雇用が創出されていると聞いている。人口減少問題が起きているなかで、東京ではできないけれども山梨ならできる、そのようなことにチャレンジする場を与えることは有効である。農業はその良い例であり、東京ではできない。30代から40代の働き盛りの人々に東京から来てもらう場合、農業生産法人のように山梨の強みや特徴を活かした方法で雇用の場を提供することは効果的だと思う。

司会

土屋さんのお話の中で、山梨をチャレンジの場として提供する場合、「東京ではできないこと。山梨だからこそチャレンジできること」を考え、そのような場を与えるというお話が非常に興味深かった。ところで、土屋さんは個人的に、山梨に来てからチャレンジしていることはあるか。

土屋さん

多くのことにチャレンジしている。東京と山梨の大きな違いの一つは時間的な制約である。東京では通勤や移動に時間を取られてしまい、時間を捻出することが難しい。平日は通勤で往復3~4時間奪われてしまう。だから、東京では17時以降に何かしようとしても難しい。しかし、山梨ではその分の時間が浮いてくる。一日の時間をより

効果的に使えるのが嬉しい。私自身は現在、夜にテニスを週2回楽しんでいるほか、ゴルフ教室、社会人大学への参加など、自分がやりたかったことを満喫している。

司会

東京から山梨に移住すると、毎日3~4時間を新たに創出できる。その時間を様々なチャレンジに充てられるということは面白い。先ほど、澤先生の「FAAVO やまなし」の話の中で、東京にいながら山梨とつながっていられるという話があった。土屋さんも「山梨は東京と近いので東京とのつながりを切らなくてもいいのが魅力」と言っていた。その点についてもう少し詳しく聞きたい。

土屋さん

私は、東京でテニスのサークルを立ち上げ、20年以上続けてきた。東京から移住するとき、その仲間と別れるのは忍びないと思った。しかし、移住先が東京から近い山梨だったので、仲間との関係は今でも維持している。東京で行われる懇親会にも簡単に参加できる。また、彼らも気軽に山梨に来ることができ。彼らは、現在私が住んでいる場所をととても気に入っており、山梨に来ることを楽しみにしている。鳴沢村で女子プロのゴルフトーナメントがあったときに東京から友人が来て、トーナメント見学後、私の自宅でバーベキューを楽しんだこともあった。彼らとの関係は、今後とも維持していくことが可能である。これも、東京と山梨の距離が近いからできることである。

司会

ここまで、「働く場」、「マッチング」、「チャレンジする場の提供」、「東京からの近さという優位性」など様々なお話を聞いた。人

口減少問題を考えるとき、山梨には様々な可能性や優位性があることを改めて感じた。最後に一人ひとりコメントをいただいて、パネルディスカッションを締めたいと思う。

大沢さん

本日の話を聞いて、山梨の魅力や資源は目に見えるものだけでなく、目に見えないものもたくさんあることに気づいた。山梨にはキラキラした魅力がたくさんあるが、私たちの手によってもっと輝かせることができると思った。私は学生として、今日、この場所に来ることができたことをとても幸せに感じている。私にはまだ4年間という時間がある。今日、学んだことを活かして、学生としてできることを精一杯やっていきたい。私は現在、飲食店でアルバイトをしながら、人との幸せな出会いを経験し、様々なことを学ばせてもらっている。そのような幸せを他の学生にも経験してもらいたい。大切なのは人と人がつながること。学生はもっと積極的に山梨のことを考え、山梨を学ぶべきである。できることなら、私の友人に今日この会場に来てもらい、倉田さんやパネラーの皆さんの話を聞いてもらいたかった。私たち学生がもっと動き、人とつながり、山梨のためになることができれば幸いである。そのために、私自身も「学生と山梨をつなげる」ための活動をしていきたい。

土屋さん

今後、山梨県の人口問題を考えていく際、県外への転出抑制を図る必要がある。その場合、働く場をいかに創出するかという点が重要となる。今年に入り、東京の企業が山梨に移転してきたというニュースがあった。これからも、行政や金融機関などが連

携しながら企業誘致を進めていくことが必要である。今日は、大沢さんの話を聞きながら、よつびし総研の存在や大沢さんのように山梨のために頑張りたいという若者がいることを知った。彼らが山梨のために活躍できるような環境を整備し、受け皿を作っていくこと、それが私たち大人の使命ではないだろうか。

澤先生

倉田さんが講演で、知る好きになる→自信が生まれる→誰かに伝えたい→地域の役に立ちたいという話をされた。その話に大いに共感している。また、地域の人々が魅力的な暮らしをしているかどうかということの重要性についても、本当に共感した。そもそも、住んでいる人が「ここには何もない」と思っていれば、何もないことしか伝わらない。住んでいる人が「ここは魅力的だ」と思えば、そのように伝わっていく。住んでいる人が魅力的でないと思っている地域は、外から見ても魅力的に見えない。先ほど「甲州らいふ」の話をしたが、学生が甲州市を魅力的だと思っている人を取材するから甲州市が魅力的に見えてくる。甲州市で活躍する人々が目を輝かせながら甲州市の魅力を語るの、聞いている学生に甲州市が魅力的に映り、甲州市を好きになる。ブータンという国は住んでいる人がみな幸福だと感じているので、私たちもその国に行ってみたくなる。同じように、私たち一人ひとりが自分の住んでいる山梨が魅力的だと感じ、それを伝えていけば、山梨はさらに魅力的になっていくだろう。今日、この会場に来てくださった皆さんは、山梨の魅力をもっともっと発見し、発信して欲しい。

倉田さん

今日の講演会を通じて、参加して下さった皆さんに山梨の魅力をお伝えすることができ、嬉しく思っている。私が有楽町のやまなし暮らし支援センターで仕事を始めた当初、この仕事をもっと良くするためにはどうすればいいのか、ずっと考えていた。その時々考えたことをノートに記入していった。ちょうど1冊目のノートが終わったときに、一つ分かったことがあった。それは「本質を見極める力を養うことの必要性」であった。2冊目が終わったときに、もう一つのことに気が付いた。それは「私の仕事の本質は山梨県内の現場にある」ということであった。それで、今年の4月から実際に山梨県内行脚を始めた。そして今日は、相談現場にいる者としてのお話をすることができた。有楽町の現場は、山梨に行きたい人のたまり場である。現在、移住希望者の7割が30代から40代である。これからの山梨を担ってくれるような方々が有楽町にはたくさん来ている。つまり人気はある。あとは、山梨側の問題である。これからは、山梨側の受け入れ態勢がさらに重要になってくる。同時に、山梨県にいる皆さんの「心の中」がとても大切になってくる。県内の魅力に気づき、それを発信しつつ、移住者を一緒に暮らしていく仲間として受け入れる。ますますのご協力どうぞよろしくお願いいたします。

司会

人口減少問題、若者の県外流出といった問題に対して、「難しい」、「打つ手はない」と閉塞感を感じることが多い。しかし、講演会やパネルディスカッションを通して、山梨の魅力と可能性を活かせば「打つ手はま

だまだある」ということを認識した。私たち一人ひとりが、もう一度山梨の魅力や可能性を見つめ直し、できることを一つ一つ実行していくことが大切である。